

マメ知識

年末の大掃除は
一家の主がすべき仕事

正月をむかえるために、神棚や仏壇をはじめとして、家の内外を大掃除することを「すす払い」という。正月は大切な年神様をむかえる行事だから、その前に徹底的に掃き浄めるのである。江戸城のしきたりにもとづいて、かつては12月13日がすす払いの日に決められていたが、最近では年末に行なう家が多い。すす払いが終わると門松を立て、注連縄を張り、餅をつけて本格的な正月準備を行なう。これらの正月準備は、すべて一家の主の仕事とされる。年神様は女性なので、女性が正月準備をした家には嫌がってやってきてくれないのである。

年神様はゆとりをもってむかえる

年末には、門の前に門松を飾る。三本の青竹（天・地・人をあらわす）の周りに梅、松を配置し、正月に備えるのだ。

門松は、年神様をむかえるための大事な依り代よりしろ。つまり、年神様が迷わず降りてこられるようにするための目印であり、鎮座するところなのである。

門松用の松を、一二月一三日に山から切り出してくることを「松むかえ」というが、最近では二八日頃に行なう家が多い。ただ、大晦日に門松を立てるのは、「一夜飾り」といって、よくないこととされる。正月まで残り一日しかないのでは、年神様を迎えるにあたって誠意に欠けるからである。また、二九日に立てるのは「九松」といい、「苦待つ」に通じるため嫌われている。

なお、門松のような神様の依り代は松の木でなくてはいけないと思いがちだが、常緑樹ならなんでもよい。神社では、神の依り代として、榊の木を使っている。

28日頃

門松

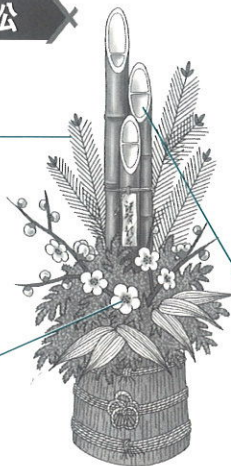
神様の目印となる門松

松

松は樹齢が長いので、長寿を意味する。また、松のような常緑樹には神様が宿るといふ言い伝えもある

梅

梅は新年の早い時期に花を咲かせる。そのため、めでたいものとして尊ばれる



竹

真っ直ぐに伸びた竹は、みずみずしい生命力に溢れたさまをイメージさせる

門松は玄関にむかって左右に一つずつ並べるのが一般的。左側を雄松、右側を雌松といい、これが神様が天から降りてくるときの目印になる

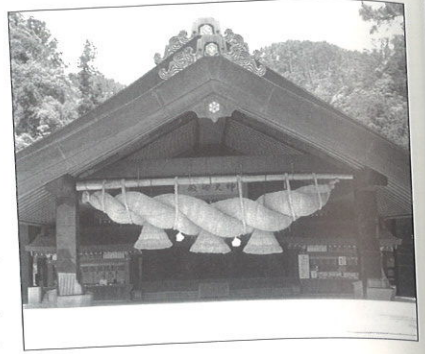
三十一日に立てるのが
よくないといわれるワケ

第2章 年中行事のしきたり

マメ知識

日本一大きな 出雲大社の注連縄

島根県にある出雲大社は縁結びの神・おおくにぬしのみこと大国主命を祀ることで広く知られているが、神楽殿に飾られている注連縄のサイズは驚異的である。なんと長さ13メートル、胴回り8メートル、重さ5トンもあるのだ。これほど大きな注連縄は珍しく、長さと同回りは日本一。通常は左回りであるはずの渦の向きが逆になっていることも、特徴の一つといえる。この注連縄には、興味深いいわれがある。注連縄に向かって賽銭を投げたとき、コインがうまくさされば願いがかなうというジンクスがあるらしい。そのせいもあってか、訪れる人は後を絶たない。



注連縄を張れば年神様を招くちからが増すと信じられているからである。注連縄の縄はどれも左巻きに渦を巻いているが、これは神様を招く回転方向が左回りとされていることに由来する。相撲の力士の足の運び方や盆踊りの輪の向きが左回りなのも、これと同じ理由からである。左巻きの縄に、三本、五本、七本の切り下げが垂らされることから、注連縄を「七五三縄」と書くこともある。

たとえば、正月飾りに注連縄を使うのは、注連縄を張ることで、そこに神を招くちからが生じるともいわれる。

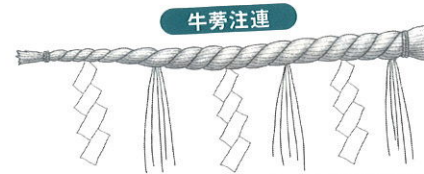
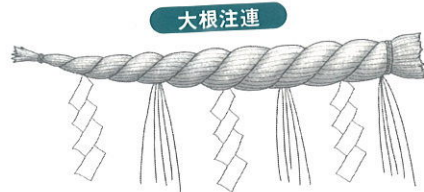
また、注連縄を張ることで、そこに神を招くちからが生じるともいわれる。注連縄が張られた結界のなかには、悪霊や邪鬼が近づけない。神様の神聖な領域には、魔物を寄せつけないちからがあるわけだ。

邪悪な者を阻止し、神様を招く

28日頃

注連縄

いろいろな注連縄



注連縄には前垂注連、大根注連、ごぼう牛蒡注連、丸注連、輪注連などがあり、神社や家庭の神棚に用いる場合には、むかって右に太いほうを取りつける。商家の場合には、細いほうを船の触先に見立て、入口に近い方を太くすることがある

神社や神棚に張られる
縄の役割とは？

マメ知識

そば以外の年越し料理



大晦日の夜の食事は特別である。年越し料理といえばそばが有名だが、地方によってはそば以外の年越し料理を食べるところもある。東北地方の「年越し膳」、長野県伊那地方の「年取り膳」とよばれる料理などは有名だ。祝い事に欠かせない尾頭つきの魚とともに、昆布巻きやなますなどのごちそうが並ぶ。サケ、ブリ、イワシなどは「年魚」とよばれ、とくに縁起のいい食べ物とされている。この年越し料理の豪華さは、江戸時代まで日没が一日のはじまりとされていたことに起因する。つまり大晦日の夜は、すでに正月だったので、祝いの膳となったのである。

31日

年越しそば

伸びやすいからいいのか、
切れやすいからいいのか？

さまざまに伝わる年越しそばの由来

大晦日に年越しそばを食べる習慣は、江戸時代に定着した。忙しい月末の夜中にそばを食べる、「三十日そば」という商家の風習の名残である。

ただ、年越しそばの由来については諸説入り乱れ、定説はない。一般的には、そばは細く長くのびることから、年越しそばを食べると寿命を延ばそうとする縁起担ぎとされている。

反対に、そばは切れやすいことから、悪運や災厄を断ち切るためともいわれる。

さらに、金銀細工師が金粉を集める際、水で練ったそば粉を金粉に押しつけて集めたことから、「そばには金を集める力がある」という言い伝えを信じたとする説も捨てきれない。

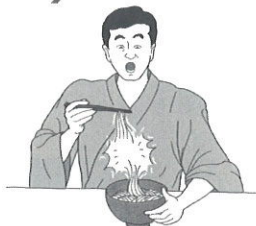
なお、引越しのときに近所への挨拶でそばを配る風習も、江戸時代末頃に始まっている。これは、そば（近所）に越してきたことに掛けて、「そばで末長いお付き合いをよろしく」という願いを込めた風習である。

年越しそばを食べる理由



金粉集めに使われていた

金運を強めてくれる縁起物



そばは切れやすい

悪運や災疫との縁をきっぱり断ち切ってくれる



そばは細長くのびる

寿命が延び、家運が上向くようにと願う縁起担ぎ

マメ知識

火を焚いて神様をむかえる除夜祭

大晦日の夜に神社で行なわれる除夜祭(じよやさい)では、夜通し火が焚かれ、神酒や甘酒が参拝客に振る舞われる。厄を落として、新しい年がよい年になるよう祈るのである。その起源は、神官や僧侶が翌年の幸運を祈って年籠りの祈禱を行ない、社前で火を焚いたことにある。昔の大晦日は、寝ずに物忌みをして過ごすのが習わしで、人々は神社に参拝して、社前に焚かれた火を分けてもらった。八坂神社のおけら参りでは、いまでも参拝客が神社の焚くおけら火を火縄につけて持ち帰っている。最近では、除夜祭から初詣へとそのまま移行することが多い。



31日

除夜の鐘

人間の煩惱も一〇八個ある

一二月三十一日の夜には、除夜の鐘が一〇八回鳴らされる。「一〇八」と決まっているのは、人間の煩惱(ぼんごう)が一〇八個あると考えられているからだ。煩惱と同じ数だけ鐘を鳴らすことで、それを消していくのである。

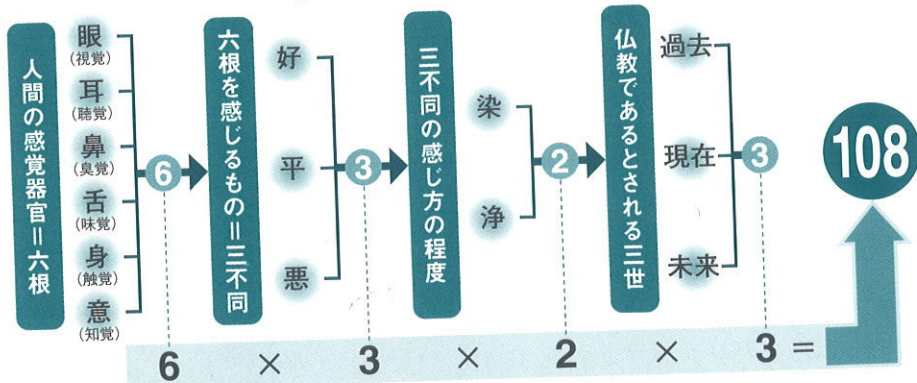
ではなぜ、煩惱は一〇八個なのだろうか。仏教では、煩惱の内訳を次のように説く。

まず人間には、「眼、耳、鼻、舌、身、意」の六つの感覚器官がある。これを「六根」というが、六根が感じるものは「好、平、悪」の三つに分けられる。そのため、六根が受け取った感覚は、六×三で一八通りとなる。

さらに、受け取り方の段階は、「染、浄」の二通りの程度があるとされ、一八通りが二段階で、三六通りとなる。

これらの感覚には、「過去、現在、未来」という三つの時間帯が存在し、それぞれが影響しあって人間を煩わせるとされる。三六通りの感覚が三つの時代から影響を受けるといふことは、三六×三で一〇八となる。

108ある煩惱の内訳



必ず一〇八回鳴るのはどうしてなのか?

座布団

座布団を開くことで
相手の開運を願う

日本家屋の間取りは、使い方によってどうにでも変化させられる便利なものだ。

たとえば、四畳半に折りたたみのちゃぶ台を出せば食事スペースになり、ちゃぶ台をしまつて押し入れから布団を出せば寝室になる。こんな生活スタイルにあつては、使わない布団はたたんでおくのがふつうである。

また来客があつたとしても、座布団を出して並べれば即座に客の席がつくれる。

布団同様、座布団は日本間を有効利用するための必需品。もともとは、古代の板張り床だった時代に使われていたワラ製円座や薄べり、ゴザなどと同じようなものだった。何もない床に置いたり敷い

たりして、人の座る場所をつくるための道具だったのだ。

畳張りの部屋であれば、円座のように小さめの布団を置くことで座る場所の限定ができる。

その円座は、やがて約六〇センチ四方の幅の布団に変わっていく。それがいまの座布団の原形で、明治時代以降に普及した。

布団を使うときには、たたんでおいたものを開いて使う。これと同じ発想から、座布団もたたんだものを開きながら客にすすめるのが作法とされる。

「開く」行為が、運が開けるに通じて縁起がいいからというのが最大の理由である。

また、客の目の前で開くことにより、「座布団には何の仕掛けもないので、安心して座ってください」ということを示す意味もあつたようだ。

折ったまま客に出すのが
正しい作法とされる理由は？

座布団の出し方

二つ折りにして出す

運が開ける



広げたまます

運が開けない



布団は折りたたんであるものを開いて使うようになっているが、それは座布団も同じ。客人に座布団を出すときには二つ折りの状態で運んでいき、目の前で開いて見せる。そうすることで、運が開けるのである

塩

塩は穢れを祓い浄める
生命の象徴

日本の国技・相撲では、取組前に力士が土俵に塩をまく。

また、通夜や告別式から帰宅したときも、玄関に入る前に体に塩を振りかける。

これらは、どちらも塩の霊力にすぎる作法である。塩は邪気を祓い、穢れを除くと信じられている。

もともと相撲は古代の神事起源のある競技で、神に奉納する儀式だった。そんな神聖な取組を前にして、地中の邪気を払っておくというのが塩まきの目的だ。

葬儀後の塩も、「死」にまつわる穢れた場所についてしまった穢れを、家のなかに持ち込まないようにするためのものである。

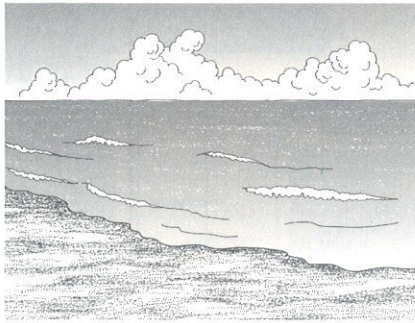
塩に霊力を認める風習は、日本ならではの神道の思想にもとづく。

四方を海に囲まれた日本では、海のかなたに神の常世の国があると信じられていた。それで海の近くの土地では、海水での禊が行なわれたり、神輿の海上渡御の行事があったりするのである。内陸部では、海から採れる塩が海水の代用として使われる。

同時に、塩は人間が生命を維持するのに不可欠な物質で、大切に扱われる貴重品でもあった。そのことが、塩の霊力への信仰をいっそう強めたといえる。神棚を祀る家では、いまでもお神酒と盛り塩を供えるのが作法とされている。

ただ同じ盛り塩でも、飲食店が店先に置く場合は、信仰とは無関係。これは皇帝の愛妾が、塩につられて牛車のウシが止まってくれるよう念じて塩を置いた、という中国の故事を客寄せになぞらえたものだ。

塩は穢れを浄める



海の水には祓いの霊力がある



海の水から取れる塩にも穢れを浄める
霊力がある



大量の塩を土俵にまく力士

相撲や葬式帰りのお浄めに
塩をまくのはどうして？

日常のしきたり

ダルマ

禅宗の祖・達磨大師が
必勝祈願の縁起物に

転がしてもくると起き上がる

ダルマは、「七転び八起き」のたとえもあり、縁起がいいとされる。願掛けに用いられることも多い。願いごとがあるときは片方の目を黒く塗り、その願いがかなったら、残りの片方を黒く塗る。

ダルマとは梵語のDharma(と)とで、「法」を意味するが、我々が親しんでいるダルマは、菩提達磨(達磨大師)という禅宗の祖をモデルにしている。

達磨大師は、南インド香至国の第三王子として生まれ、出家して中国に渡ったと伝えられる。嵩山の少林寺で、九年間壁に面して坐禅をし、ついに禅の奥義を悟った。ダルマに手足がないのは、坐禅を組んでいる様子を模したからとも、

あまりに長い間坐禅の修行をしていたため、手足が腐って落ちたからともいわれている。

鎌倉時代に日本に禅宗が伝えられると、その姿が雪舟をはじめ多くの禅僧や文人によって描かれた。

また、転がしても元に戻る起き上がり小法師は室町時代頃に生まれた玩具だが、当初は達磨ではなく、中国の白髪の老人の姿をしていた。これがやがてかわいい童子の姿に変わり、江戸時代にダルマとなった。いまでは多くの人に「ダルマさん」として親しまれている。

ちなみに、ダルマさんが赤く塗られているのは、達磨大師の衣の色に由来する。

禅宗で赤い衣を着ることができるとは、大僧正だけであり、達磨大師の尊い姿をあらわしているのである。

なぜダルマは真つ赤で
手足がないのか？

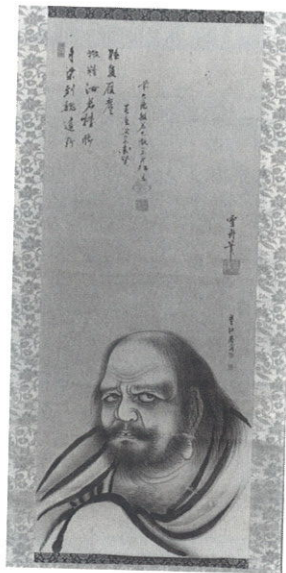
庶民に広まった達磨



選挙のときによく見られる片目ダルマ。赤く塗られているのは、達磨大師が着ていた衣の色に由来する



起き上がり小法師。達磨大師の坐禅姿を模してつくられている



禅宗の祖・達磨大師。インド出身で、正式には菩提達磨という。中国の少林寺において9年もの間坐禅修行し、悟りを開いたと伝えられる(『春屋宗園贊達磨図』雪舟作)

衣替え

寒露・長崎くんち(長崎)

金刀比羅宮大祭(香川県)

牛祭(京都・広隆寺)

御会式

神嘗祭(三重・伊勢神宮)

20日

恵比須講

日本起源の神様は恵比須だけ

七福神は日本人になじみ深い神々だが、その出自をたどると、みなインドや中国の出身で、国際色豊かなことがわかる。

ただ、福の神として知られる恵比須だけは日本に起源がある。恵比須は神託の守護神・コトシロヌシノカミと太陽神・蛭子(ひるこ)が習合したものとされている。つまり、もともと日本の神道の神様だったのだ。

そんな恵比須を祀る催しが、恵比須講である。同業者や地域の人々が「講」という団体をつくり、祭りを盛大にするための資金を毎月積み立てていたところから、こう名づけられた。この日はさまざまな催しを行ない、鯛や鰯(いわし)を食べるしきたりが残っている。

恵比須はもともと漁民に信仰されていた神様なので海運守護のご利益があるが、商売繁盛や家内安全、無病息災にも効果を発揮するという。

恵比須講は、関西、四国、九州地方でいまもさかんに行なわれている。

七福神はほとんどが外国出身の神様だった

恵比須と七福神

ほてい 布袋

中国の後梁時代の禅僧。七福神のうち、唯一実在した人物といわれる

べんざいてん 弁財天

インドのヒンドゥー教出身。仏教に取り入れられ、芸術の女神になった

たいこくてん 大黒天

ヒンドゥー教出身。もとは憤怒相の悪神だったが、福德の神になった

えびす 恵比須

日本出身。もとは漁民の神だったが、商売繁昌の神となった

びしゃもんてん 毘沙門天

インド神話出身。仏教に入ってから、四天王の一人として信仰されている

ふくろくじゆ 福祿寿

中国の道教出身。寿老人の化身とされ、長寿と幸福の徳をもつ

じゆろうじん 寿老人

福祿寿と合体、異名の神とされている



元日・年賀状・初詣

初夢・書初め・だるま市

小寒しょうかん

人日・七草じんじつ

初薬師・十日えびす(京都)

十日えびす(大阪)

鏡開き

小正月・左義長・なまはげ(秋田)

初閻魔・藪入りはつえんま

1日

年賀状

日本人は言葉に魂を込めた

一年のはじめには、年賀状を送るのが習わしになっていくが、これは相手の幸せを願う、美しい習慣といえる。

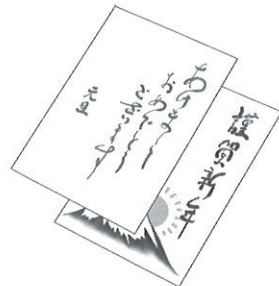
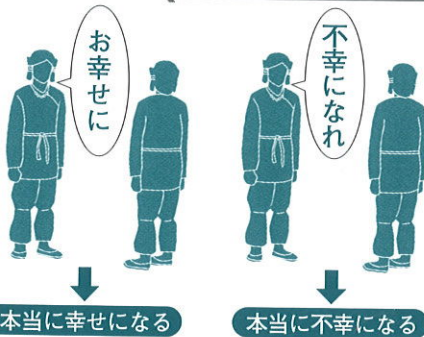
古代の日本人は、言葉そのものに霊的な力があり、魂が宿つていると考えていた。発した言葉がそのまま現実となり、人の幸せや不幸に直接関係すると信じていたのである。

そのため、悪い結果を招くとされる言葉は忌み言葉として極力使わないことにしたし、逆に良い結果を招くとされるめでたい言葉は積極的に使うことにしていた。

年賀状に必ず「おめでとう」と書くのは、「おめでとう」という言葉を相手に送ること、相手の新しい一年がめでたくなると信じる気持ちからである。

だから、どんなに通り一遍な言葉だと思っても、そうした意味を汲み取り、年賀状には、心を込めた「おめでとう」の一言を添えたい。それによって相手は、めでたい一年を送ることができらるだろう。

言霊信仰から生まれた年賀状



送られた相手は
本当にめでたくなる

古代の日本人は、言葉に魂があるという呪術信仰をもっており、発した言葉は現実になると信じられていた

「明けましておめでとう」と
賀状に記す理由とは？

31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18



左義長祭り（どんど焼き）

初観音

大寒・初大師・初庚申

初地藏

初天神

初不動

2日

初夢

2日夜の夢で一年の計を占う

初夢は「一富士、二鷹、三茄子」がおめでたいとされている。一番縁起がいいのは富士山の夢、二番めは鷹の夢、三番めが茄子の夢というわけだ。

この順位の根拠としては、次の二つの説があげられる。

まず、富士、鷹、茄子は、すべて徳川家康の出身地、駿府の名物である。そこで、これらの夢を見ると家康のように立身出世できると伝えられてきたのではないかというのだ。別の説によると、三つとも仇討ちに関係しているという。

富士は、曾我兄弟が富士山の裾野ではたした仇討ちをさし、鷹は、赤穂浪士の主君・浅野家の紋所が鷹であることから、四十七士の討ち入りをさす。茄子は、渡辺数馬が河合又五郎を討った伊賀の名産品だという。

どちらも真相ははっきりしないが、よい初夢を見たいなら、七福神が宝船に乗っている絵を枕下に置くと効果があるそうだ。

おめでたい初夢(三大仇討ち説)

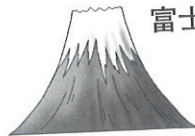
鷹



赤穂四十七士が吉良上野介を討つ。鷹は赤穂浪士の主君、浅野内匠頭の紋所

2

富士



鎌倉初期の武士、曾我兄弟が父親の仇である工藤祐経を富士の裾野で討つ

1

茄子



渡辺数馬が茄子の産地である伊賀で仇敵、河合又五郎を討つ

3

なぜ「一富士、二鷹、三茄子」といわれるのか？

マメ知識

神社での参拝は 二礼二拍手一拝が基本

神社に参拝するときの正式な作法を、二礼二拍手一拝という。まず賽銭さいせんを入れ、二度礼をし、祓詞はらいことばを唱える。つぎに二度手を打つ。これを拍手かしわでといい、手を肩幅ぐらいに広げてゆっくりと行なう。このとき同時に、心のなかで神様への願い事を唱えるといい。その後、もう一度礼をする。神前にいるのだから、背筋を伸ばし、きちんとした姿勢を心がける。礼をするときは、45度くらいまで腰を折るのが適当だろう。そして参拝でなにより重要なのは、心の底から神様を敬う気持ちを込めること。どんなに素晴らしい拝礼でも、心がなければ願いは届かないものだ。

【神前で唱える祓詞】

掛けまくも畏き伊邪那岐大神、筑紫の日向の橘小戸の阿波岐原に禊祓給ひし時に生り坐せる祓戸の大神等、諸の禍事・罪・穢あらむをば、祓へ給ひ清め給へと白すことを聞こし召せと恐み恐みも白す。

（訳）畏れ多い伊邪那岐大神様が筑紫の日向の橘小戸の阿波岐原において、禊ぎでお祓いされたときに生まれた神々よ、数多の罪穢れをお祓い、お清めください。

近代に一般化した新しい風習

1日 初詣

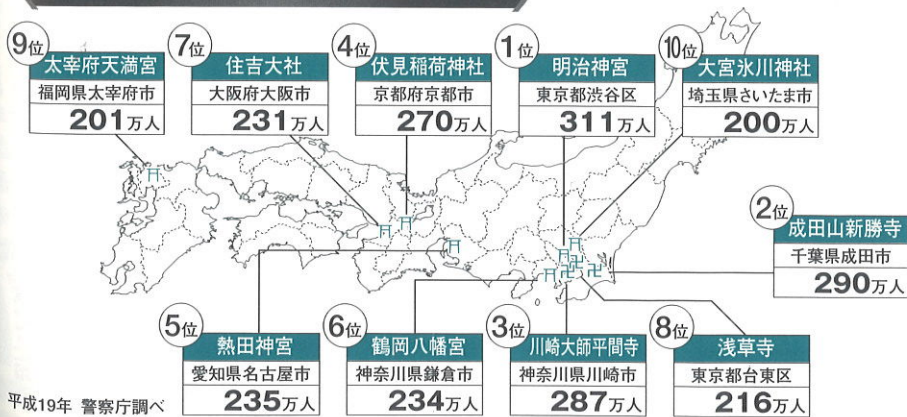
新年をむかえ、はじめて社寺へ参することを初詣という。初詣の習慣は明治から大正にかけて広まったもので、それ以前は、参拝に出るのではなく、新しい年の神（年神様）を自宅にむかえて祀るのが一般的だった。

初詣の由来には、二つの説がある。一つは、新しい年の神をむかえるために、大晦日に氏神様の社に籠もった年籠りの習慣が、いつしか氏神神社へ参る形に変化したという説。かつて一続きとされていた大晦日の夕方から元日の未明にかけての時間を、一年の区切りとして分割しようとする考えが徐々に一般化したようである。

二つめは、陰陽道の恵方参りに由来するという説だ。恵方とは、年神様が回る方角のことで、非常に縁起がよい。そのため、恵方にある社寺へ参っていたのが、いつしか初詣になったという。

そんな初詣だが、最近では、明治神宮などの有名な社寺へ参るのが人気となっている。

初詣の人出が多い神社ベスト10



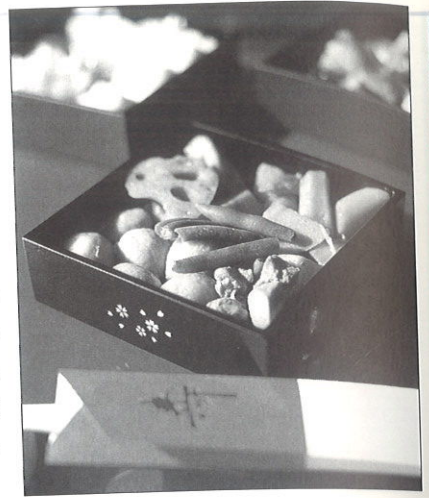
正月に社寺へ詣る習慣はいつ頃始まったのか？

平成19年 警察庁調べ

マメ知識

お節料理では「四の重」といわない

正月用の料理をお節というが、これは「御節句」を略したもの。もともとお節は神様への供物であり、身内や友人と分け合うごちそうだった。また、お節は保存食でもあったため、重箱に詰めるのが普通である。一の重には黒豆、数の子、昆布巻きなどの口取り、二の重には鯛や鰯などの焼き物、三の重には酢の物、与の重にはゴボウ、ヤツガシラ、里芋などの煮物を、縁起を担いで奇数個詰める。「四」の字を使わないのは、「死」に通じて縁起が悪いからとされる。ちなみに、必ず田作り（ゴマメ）が入るのは、ゴマメが田を耕すときの祝い魚だからである。



1日

お屠蘇

飲めば無病息災の効果がある

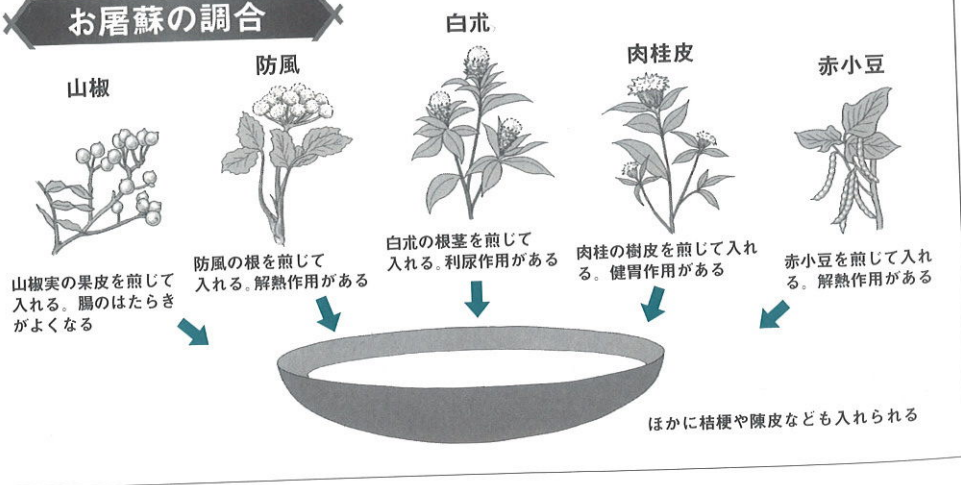
正月にお屠蘇を飲む風習は、「厄祓いになり、その年は病気をしない」という言い伝えとともに、古くからの日本の伝統として知られている。

これを儀礼的な日本酒と想っている人も多いかもされないが、タダの清酒ではない。「屠蘇」の字には「死んだ者も生き返る」といった意味合いがあり、事実、山椒、防風、白朮、桔梗、陳皮、肉桂皮、赤小豆などが調合された漢方薬を含む薬効酒なのだ。

この屠蘇散とよばれる漢方薬の調合法を記したのは、魏の華佗という名医だったらしい。もともと中国で始まった風習だったが、いまは中国にはなく、日本だけの風習になっている。屠蘇散は薬局で売っているので、手軽に利用できるだろう。

なお、お屠蘇には、年少者から飲んでいくという作法がある。これは、年少者の力を年長者が譲り受けるためとか、年少者の成長を喜ぶ意味合いがあるとされている。

お屠蘇の調合



形式的なものではなく
ちやんと薬効がある

マメ知識

七草がゆの準備に歌う囃子歌



1月6日の夜から7日の早朝にかけて、七草をまな板の上できざみながら囃子歌を唱え、七草がゆの準備をすることを七草叩きという。神棚の前にまな板を置き、火箸・播粉木・杓子・おろし金・菜箸・火吹竹・薪割の七つ道具をそろえる。囃子歌は、「七草七日唐土の鳥が渡らぬ先にトコントン」とか「七草なずな 唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に 七草なずな手につみ入れて あみぼし ところき ひつき ちりこ」など、地域によって異なる。唐土の鳥とは、災疫を取り除く怪鳥をさし、この鳥を詠う囃子歌は多くの地方に伝えられているという。

7日
七草

七草を食べて疲れた胃を休める

正月七日の朝に、セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロという春の七草を入れた七草がゆを食べれば、一年間無病息災で過ごせると信じられている。

この風習の起源は、中国の人日（五節句の一つ）にあるという。中国の正月には、日ごとに何を占うかが決められていた。たとえば、一月一日は鶏の日で、鶏について占った。一月七日は、人を占う日とされていたので「人日」とよばれ、七種の菜が入った吸い物を食べるとういよとされた。

日本で最初に七草の吸い物が登場する文献は、平安時代の『皇大神宮儀式帳』。この頃、七草は宮中儀式の一つだったようだ。

それが鎌倉時代に入ると、吸い物からかゆに変わる。さらに江戸時代になり、幕府が中国から五節句を取り入れたことにより、人日の節句に七草がゆを食べる習慣が、一般にも定着したという。

七草の薬効

かつて食の貧しかった時代には、七草を食べて滋養に役立てていた

かつてはかゆではなく吸い物を食べていた

			
ゴギョウ(ハハコグサ) キク科 二年草	ナズナ(ベンベンガサ) アブラナ科 二年草	セリ セリ科 多年草	
利尿作用	目の疲れを軽減	ビタミン豊富	
			
スズシロ(ダイコン) アブラナ科	スズナ(カバ) アブラナ科	ホトケノザ(コオニタピラコ) キク科 二年草	ハコベラ(ニワトリグサ) ナデシコ科 多年草
喉の痛みを軽減	ビタミン豊富	鎮痛作用	歯槽膿漏予防

マメ知識

東日本は切り餅、西日本は丸餅

雑煮には、地域ごとの特色があらわれる。一般に、東日本では四角い切り餅で澄まし汁仕立てが、西日本では丸餅で味噌仕立てのものが多い。境界はというと、富山県から三重県のあたりで南北に分かれるとされている。丸い餅は、日本古来の伝統にもとづくものだ。もともと雑煮は、神様への供物を下げ、それを小さな丸い餅と合わせてごった煮した食べ物だった。西日本にはそうした伝統が色濃く残っているのだろう。一方、四角い切り餅は、武士の携帯食に由来する。武士は戦場への保存食として四角い餅をもっていた。東日本では、武家礼法の影響が大きかったというわけだ。



鏡開きの餅は神様のお下がり品

正月には、円形の大きな餅の上に小さな餅を重ねて飾りを施した鏡餅を、神棚や仏壇、玄關などに飾る。かつて餅は高級品だったため、神様への感謝の気持ちを込めて供物として捧げたのである。

その鏡餅を一月一日にたたき割り、煮たり焼いたりして食べることを鏡開きという。鏡開きは江戸時代の武家の習慣で、刃物を使わずに木槌で割った。

餅を割るのに、なぜ「開き」なのかというと、忌み言葉である「切る」「割る」を避けようとする意図があるからだ。

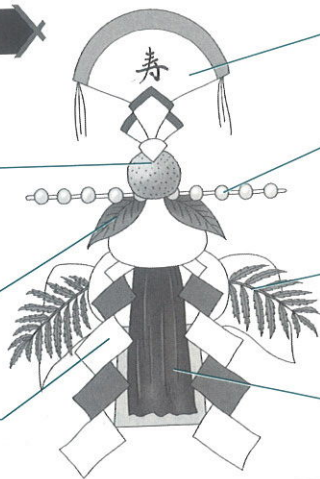
正月用についた餅は、一〇日も経てば固くなる。つきたてのおいしい餅ではなく、わざわざ固くなるまで日を置いてから食べるのは理にかなわない気もするが、これにも意味がある。

神様に捧げた供物である餅を数日間供えておくことで、その餅は神様からのありがたいお下がりになるからなのである。

11日 鏡開き

鏡餅の意味

- 橙**
家が「代々」にわたって栄えることを願う
- 護葉**
子孫の繁栄を願う
- 四手**
大きく手を広げ、繁栄することを願う



- 扇**
末広がりの繁栄を願う
- 串柿**
家庭円満につながると思われる縁起物
- 裏白**
真っ白で清浄な心であるよう願う
- 昆布**
「よろこぶ」を語呂あわせしたものの

古くて硬い餅をわざわざ割って食べるワケ

さつぽろ雪まつり(札幌)

節分 せつぶん
立春 りっしゅん

事始め・針供養

建国記念日

初午

バレンタインデー

祈年祭

悪霊退散に効果のあるイワシ

3日頃

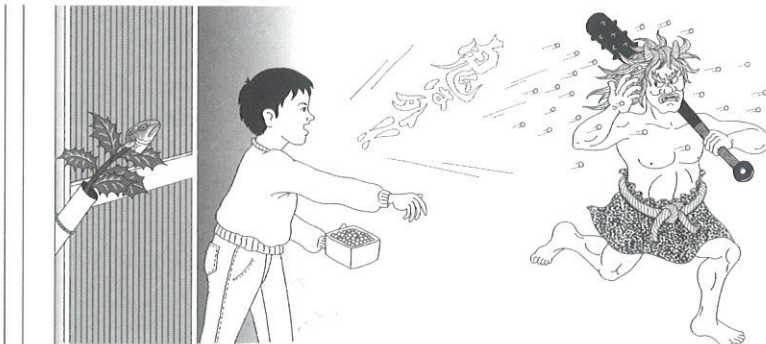
節分

節分には、「福は内、鬼は外」と叫びながら豆をまく。毎年、大きな神社で年男、年女の有名な豆まきしている光景も見慣れたものになってきた。

節分は、中国から伝わった疫病や災害をもたらす鬼を祓う儀式に由来する。この儀式は追儺とよばれ、平安時代には、大晦日の宮中で行なわれていた。それが室町時代になると豆まきに変化して民間にも伝わり、立春前日の節分の日に行なわれるようになったという。

鬼祓いに豆が使われるのは、鞍馬山の鬼退治の際、毘沙門天が「目に豆をぶつけるといい」と助言した伝説によるとされる。鬼の目(摩目)に豆を投げつけることで、「摩滅」になるといった語呂合わせだったのではないかともいう。また、玄関口にヒイラギの枝に刺したイワシの頭を立てておくのは、ヒイラギのトゲとイワシの悪臭によって、鬼を追い払うためだ。鬼はイワシを焼いた煙の臭いが苦手なので、家に入れなくなるのである。

節分の豆まき



一般の家庭では「福は内、鬼は外」と大声で叫びながら豆をまくが、成田山新勝寺などでは鬼を悪者としないので、「鬼は外」とはいわずに「福は内」とだけ叫ぶ

怖い鬼たちを退散させる
豆以外の必需品とは？

雨水うすい

梅花祭(京都・北野天満宮)

閏日うるうび
(四年に一度)



さっぽろ雪まつりの雪像

8日

針供養

針に感謝し供養してあげる

針供養では、折れたり曲がったりして使えなくなった針を、こんにやくや豆腐、餅などのやわらかいものに刺し、くだものや野菜を供えて供養する。関東地方では二月八日、関西、九州地方では二月八日(事八日)に行なわれることが多い。

昔の女性にとって毎日の針仕事は、根気のいる重労働だった。そんな針仕事もこの日だけは一休み。日頃お世話になっている針に感謝し、裁縫の上達を祈願した。

この日は本来厄日と考えられており、厄日に仕事をするとうまくないとの伝承から針供養が生まれたといわれている。

こんにやくや豆腐に刺した針は、神棚に供えた後、神社でお祓いしてもらったり、川に流したりする。豆腐やこんにやくは、そのまま食べてしまう場合もある。

最近はずっと馴染みの薄い行事となってしまうが、洋裁や和裁に携わる人たちの間では、いまだに重要な儀式である。

浅草寺の針供養



針供養では、1年間使った古い針を豆腐やこんにやくに刺して供養する。右はたくさんの針が供養されている供養塔



使えなくなった針を豆腐に刺してどうするつもり？

上巳じょうし・雛祭り

啓蟄けいちつ

お水取り(奈良・東大寺)

ホワイトデー

涅槃会ねはんえ

彼岸ひがんの入り

3日

雛祭り

人の代わりに厄を託された人形

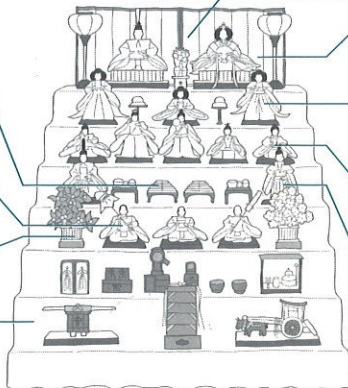
三月三日は女の子の節句だ。雛祭りには雛人形を飾り、雛あられや菱餅ひしもち、白酒しろざけを供えてお祝いをする。

雛祭りには、中国から伝わった五節句の一つ、上巳じょうしの節句に起源がある。上巳とは三月のはじめの「巳」の日をいい、この日には厄を祓うために酒を飲み、水浴びをして身を清めた。これが日本の禊みそぎの風習と習合し、日本でも上巳の日に水浴びするようになったのだが、やがて身代わりの人形をつくって、川などに流し始めたという。つまり、いわゆる流し雛が本来の雛祭りの姿だったのだ。

雛人形が贅ぜいを尽くした高価なものになるにつれて、この風習は廃すたれ、人形は飾るものになっていった。だが、もともと人の身代わりに厄を託されるのが人形の役目。そこから、「雛祭りの後すぐに片づけないと晩婚になる」といわれるようになったらしい。当時の娘にとっての一番の災難は、婚期が遅れることだったのである。

雛段飾り

関西では向かって左が女雛、右が男雛となるが、関東では左右反対になる



菱餅は下から緑色・白色・桃色となっている。この三色はそれぞれ健康・魔除け・清浄をあらわす

五段目=三仕丁しちやう

雑務をこなす。傘、沓台、台笠を持ち、笑顔、真面目顔、泣き顔をしている

桜橋さくらばしは京都御所にある「左近の桜」と「右近の橋」を模している

除穢じゆたい説では、奇数が吉数とされるため、雛壇も必ず奇数にしなければならない

一段目=内裏雛だいり

男雛を「お内裏様」、女雛を「お雛様」とよぶことがあるが、これは誤り。男女一対で内裏雛という

二段目=三人官女

女雛の世話をする、お付きの侍女。歌を詠んだり、楽器を奏でたりする

三段目=五人囃子

元服前の貴族の子弟。笛、太鼓などをもち、能の囃子方を模している

四段目=武官

親王雛に仕える最高の武官。向かって右が上官となる左大臣で、左が右大臣

雛人形をずっと飾っておくのが禁忌とされる理由は？

春社
しゅんぶん
春分

彼岸の明け

花会式(奈良・薬師寺)



お彼岸に食べるぼたもち

18日頃

彼岸

気候の変わり目に先祖を供養する

彼岸とは、春分の日、秋分の日をはさんだ前後一週間に、先祖の供養をしたり墓参りをしたりする、日本独自の行事である。

彼岸という言葉は、サンスクリット語の「波羅蜜多」からきており、仏の悟りの世界である向こう岸に渡るという意味だ。

しかし向こう岸に渡るには、六波羅蜜(布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧)の徳をつむための修行が必要で、インドや中国では、仏の世界へ行けることを願って、七日間の修行がさかんに行なわれていた。

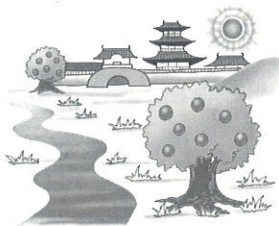
それが日本に伝わると、先祖供養の風習へと変化したのだが、理由については定説がない。

一説には、聖徳太子が仏教信仰を広めるために、日本古来の祖先を敬う祭りと彼岸を結びつけたのではないかといわれている。

「暑さ寒さも彼岸まで」というように、彼岸は気候の変わり目を知らせる役割ももっている。

彼岸とは

此岸から彼岸にいたるための修行を六波羅蜜といい、それが平安時代に先祖崇拝の行事へと変化した。江戸時代になると、一般庶民にも広まった



彼岸

完成された悟り(涅槃)の世界



此岸

欲と苦に満ちた迷いの世界

仏道に精進して川を渡る

「お彼岸」の起源はなんとインドにあった

花見のころ
強飯式ごうはんしき(日光・輪王寺)

清明せいめい

青柴垣神事あおふしがき(島根・美保神社)
花祭り

けんか祭けんかまつり(新潟・天津神社)

十三参り

桜の木には神様が宿っている

上旬～下旬
花見

日本人は、花見によって春の訪れを実感する国民だ。古来より日本では、桜をとりわけ愛でてきた。「花」といえば桜をさすということからも、偏愛ぶりがよくわかる。

それほど桜への思い入れが強いのは、桜の木に神様が降臨すると信じられていたからだろう。古代の花見は、神様とともに過ごすことにより、穢れを祓ってもらおう儀式だったのである。

また満開の桜に触れば、健康になれるともいわれてきた。事実、桜の花粉のなかのリンと硫黄を吸収すると、体内の疲労物質が消えるという。もともと自然を愛でるのが大好きな日本人は、たんに桜の花を見るだけでなく、湯に入れて桜湯にしたり、花見をしたりすることで、その美しさを存分に味わおうとしたのである。

花見は平安時代から行なわれていたが、当時の人たちの気持ちは、いまの日本人にもしっかりと残されている。

春の到来を告げる桜の開花(東京・上野公園)



奈良時代には梅が一番人気だったが、平安時代に入ると、桜の花見が貴族の重要な行事となった。そして江戸時代、徳川家光が奈良から上野に桜を移植させたことから、上野が桜の名所となり、多くの人々に花見が浸透していったという。桜の開花から満開までは一週間ほど。散り際の美しさも、日本人の美意識に強く訴えかけるものがある

日本人と桜の間にある切っても切れない関係

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18

鎮花祭はなしずめのみまつり(京都・大神神社、狭井神社)

壬生みぶ狂言がう(京都・壬生寺)

穀雨こくう

潮干狩り



4月は潮干狩りシーズン

8日

花祭り

釈迦誕生のエピソードを再現

釈迦の誕生を祝う行事を花祭りおよび。日本では四月八日が釈迦の誕生日とされているため、この日は各地で伝事がいとままれる。

釈迦が生まれたルンビニの地になぞらえて、花で飾った小堂に誕生仏を置き、その頭の上から参詣者が三回甘茶を注ぐのが、花祭りの習わしだ。

誕生仏の右手は天を、左手は地をさしているが、これは釈迦の誕生秘話にもとづく。

釈迦は摩耶夫人まやぶじんの右脇から生まれると、すぐに立って七歩進み、右手で天を左手で地をさして「天上天下唯我独尊」といった。すると、天の竜が花と甘露の雨を降らせて、釈迦の誕生を祝福したという。

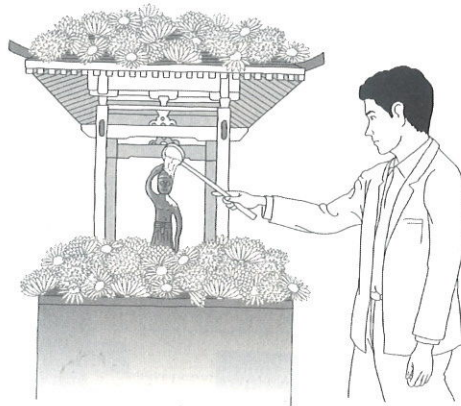
このときの様子を再現したのが、花祭りの誕生仏や花で飾った小堂であり、甘茶をかける行為である。

花祭りと呼ばれるのは明治時代末のころで、それまでは正式名称である灌仏会かんぶつえ、仏生会ぶしょうえとよばれていた。

花祭りの儀式

「天上天下唯我独尊」とは

「天上天下唯我独尊」という言葉は、「我こそが世界一尊い」と解釈されることがある。しかし、それは後の時代に釈迦を神格化する際になされたもので、実際には釈迦自身が発した言葉ではない。弟子たちが経典のなかで「釈迦こそがこの世界で最も尊い」と尊称した部分を、玄奘訳のなかで「天上天下……」と訳したのが広まったものなのだ



花祭りでは誕生仏に甘茶をかけるのが習わし

尊いお釈迦様の頭上から水をかけてしまうのはなぜ？

17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

八十八夜・聖式祭(奈良・東大寺)

博多どんたく

立夏りっか・端午たんごの節句

神田明神祭(東京・神田明神)

鶉飼うさぎかい始まる

葵祭あおい(京都)

出雲大社大祭(島根)

三社祭(東京・浅草神社)

2日頃

八十八夜

「八」が重なるから縁起がいい

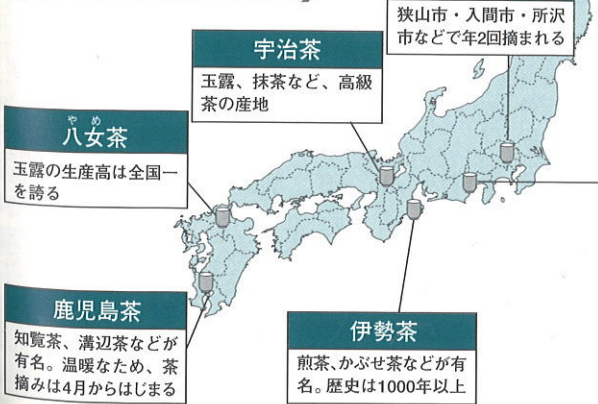
日本にお茶が広まったのは、鎌倉時代のことである。禅僧の栄西えいさいが宋そうに留学したときに、お茶の作法を身につけ、お茶の葉や種を日本に持ち帰った。当時は養生のための薬として珍重されたという。その後、お茶は神様への貢物となり、祝いごとに欠かせないものとなった。そしていまでは日本各地で生産され、広く親しまれている。

茶摘みの季節といえば、八十八夜だ。八十八夜とは立春から数えて八八日目のことで、この時期にはやわらかい良質のお茶がとれる。しかも八十八夜は縁起がよく、縁起物のお茶を飲むと長生きできるといわれる。なぜ縁起がいいのかというと、末広がりの「八」が重なっているからだ。また「米」という漢字を分解すると、「八」「十」「八」になるので、田の神さまを祀る日にもなっている。

八十八夜は、新暦では五月二日頃にあたり、農家ではこの時期から種まき、養蚕などが本格化してきて、繁忙期をむかえる。

八十八夜のお茶で長生きできる理由とは？

日本各地の茶所



静岡茶の茶摘みの風景



勇ましい五月人形

うちわまき(奈良・唐招提寺)

小満しょうまん

5日

端午の節句

鯉は武士の吹き流しが起源

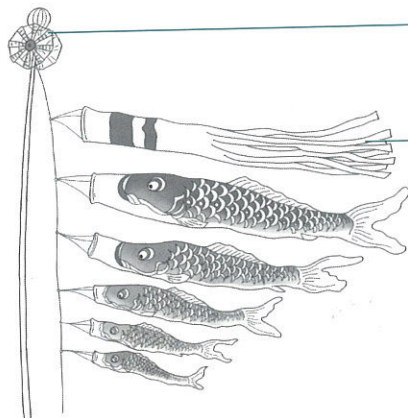
三月三日が女の子の日なら、五月五日は男の子の日である。この日を端午の節句といい、男の子のいる家では鯉のぼりや武者人形を飾り、ちまきや柏餅を食べる。邪気を祓い、元気に育つように祈願するためだ。

この端午の節句は、病気や災厄を祓う、中国の重五ちゅうごの節句が起源とされる。そこに厄除けのためとして、よもぎや菖蒲を屋根に挿したり、菖蒲湯に入ったりしていた農家の田植え時期の行事が融合したのである。

江戸時代に入ると、武家の男子の出世祈願の日という様相が濃くなる。鯉のぼりが起こったのはこの頃からで、武士の旗指し物や吹き流しもとになっている。端午の節句の必需品としては、鯉のぼりはかなり遅れて加えられたものなのである。

端午の節句が男子の出世祈願と結びついた理由としては、「菖蒲しょうぶの節句」が、「勝負の節句」「尚武しょうぶの節句」にすり代わったからではないかといわれている。

男の子の節句にかかせない鯉のぼり



籠玉

竿の先端についているのが籠玉で、その下にあるのが矢車。神を招くと同時に魔除けの効果がある

吹流し

青・赤・黄・白・黒の五色は陰陽五行説の「五行」をあらわしており、邪気を祓うちからがある。また、龍は吹き流しが嫌いなので、鯉を食べようと思っても近づくことができない

鯉

鯉は家族をあらわし、黒の真鯉が父親、赤の緋鯉が母親、その下の子鯉が子どもにあたる

出世祈願にどうして鯉のぼり上げるのか？

17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

衣替え

金沢百万石まつり(石川)

芒種

山王祭(東京・日枝神社)

浅草鳥越まつり(東京・鳥越神社)
入梅

御田植神事(大阪・住吉大社)

1日

衣替え

衣服を変えることで穢れを祓う

日本では六月一日、一〇月一日を境に、衣替えと称して夏服と冬服を替える。四季の豊かな、日本ならではの風習だ。

衣替えは平安時代の宮中行事に起源があり、この日に服装を替えることは縁起がよいとされてきた。また同時に、厄祓いの意味もあったという。

平安時代は旧暦の四月一日と一〇月一日に行なわれ、衣裳だけではなく、調度類もすべて季節のものに替えられた。江戸時代になると、四月一日からは袷小袖、九月九日から三月末までは綿入小袖というように、幕府が細い決まりを定めていたほどだった。

祓いの意味での衣替えをいまに伝えるのは、神社で催されている更衣祭。これは、物忌みの日に行なった祓いの行事で、神様の衣替えにあたる。ちなみに、四月一日と書いて「わたぬき」と読むのは、衣替えが語源となっている。四月一日は、「綿入を脱ぐ日」だったことから、そうよばれるようになった。

平安宮中の衣替え

4月 1日	あわせ 袷 <small>あわせ</small> に着替える	夏装束
5月 5日	かたびら 帷子 <small>かたびら</small> に着替える	
8月 15日	すずし 生絹 <small>すずし</small> に着替える	
9月 9日	わたいれ 綿入 <small>わたいれ</small> に着替える	冬装束
10月 1日	わりぎぬ 練絹 <small>わりぎぬ</small> に着替える	

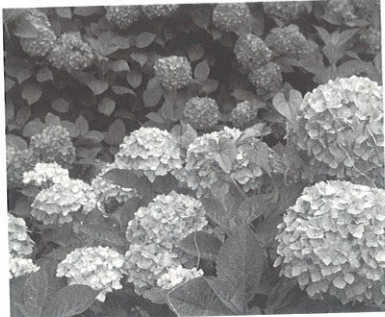


平安の昔からつづく
伝統ある風習だった

30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18

夏至

夏越の祓



鮮やかなアジサイの花

30日

夏越の祓

積もった穢れが浄められる

はじめとした気候のせい、六月は災害や疾病が多いという。そんな六月の晦日（三〇日）に、神社の鳥居や拝殿に据えられた茅の輪をくぐって、災いや穢れを祓う行事が夏越の祓である。

災いや穢れは、どんどん人の身に降りかかって積もっていくから、定期的に祓わなくてはならない。そこで、六月の晦日と二月の大晦日に祓が行なわれるのだ。

茅の輪くぐりは、牛頭天王の祟り伝説にもとづく。牛頭天王が一夜の宿を所望したとき、兄の巨旦将来は金持ちなのに宿を提供せず、弟の蘇民将来は貧乏だったが欲待した。すると、牛頭天王は蘇民の家族に茅の輪をつけさせ、茅の輪をつけていない者は皆殺しにしました。牛頭天王は、「後の世でも、茅の輪をつけている者は蘇民将来の子孫として災いから逃れられる」と言い残したという。

これにより、茅の輪をくぐることで災厄が祓われると信じられるようになったらしい。

茅の輪のくぐり方

「水無月の夏越の祓する人はちとせの命のぶというなり」と唱えながら、左まわり・右まわり・左まわりの順に八の字を描くように三度くぐり抜ける。すると穢れが祓われ、寿命が千年も延びるとされている



茅の輪をくぐると
どんなご利益があるのか？